

全カリと専門のあいだ ～全カリの授業を担当して～

日時：2001年12月4日（火）17：30～19：30

場所：本学12号館第2会議室

報告：西原 廉太（文） 星野 宏美（文） 橋本 博之（法） 柴崎 徳明（理）
堀 耕治（文） 長島 忍（経済） 沼澤 秀雄（コミ福） 鈴木 秀一（経）
司会：服部 孝章（社会学部教授、全カリ社会学部運営委員）
吉岡 知哉（法学部教授、全カリ社会科学教育研究室主任）

I はじめに

吉岡（司会） 全カリの総合部会は、いくつかの研究室に分かれていて、いろいろな活動をしています。しかし、実は総合部会全体として集まる機会があまりなかったこともあって、部会長の斎藤先生が中心になって、一度ワークショップをやるのではないかとということになりました。

何度か打ち合わせをし、話し合いを重ねているうちに、総合部会が抱える課題として次のような点があげられてきました。

・言語部会はそれぞれの研究室に分かれているが、固有のメソッドをもち、目的もかなりはっきりしているという側面があるのに対して、総合部会では必ずしもそれが明確ではない。

・それぞれ専門の授業を受け持っているわれわれが、全カリの授業を担当しているが、専門の授業と全カリの授業とはどういう関係にあるのか、たとえ

ば教え方が変わるのかどうか、など。

・他学部の学生も含めたところで教えることは、技術的に、あるいは心理的にどうか。実際問題として教えやすい、教えにくい、などという点はどうか。

・総合部会の各研究室の主任同士は顔を合わせる機会があるが、研究室の室員同士は、あまり顔を合わせる事がなく、そういう意味でかなりばらばらなところがある。

以上のようなこともあって、とにかく一度集まり、少なくとも経験のある程度共有するほうがよいのではないかと、ざっくばらんな話し合いをして、総合部会のある種の共有財産を作ってみようではないかと、ということになりました。

そこで、今日はまず「全カリと専門のあいだ」というテーマで、お願いしている何人かの先生方に簡単にお話をさせていただいて、その後、それを基に自由な意見交換をするということにしたいと思います。それは技術的なことでもいいでし

ようし、何らかの感想であってもいいと思っておりますが、気楽に意見交換をしていきたいと思っております。

Ⅱ 報 告

文学部助教授
全カリ人文科学研究室主任
西原 廉太

文学部キリスト教学科の西原です。話題提供ということですので、私自身が全カリで何をやっているか、どういう授業をやったかという経験を簡単にご報告したいと思います。

私は、ここ数年は全カリの総合Bのコーディネーターをさせていただいております。今年も昨年も、科目としては、「日本社会と民族差別—多民族多文化共生社会の意味」という総合Bをやっております。担当者は、私がコーディネーターで、あとは、香山チャプレン、それから、昨年度ですと、金性済(キム・ソンジエ)さん(在日大韓キリスト教会牧師)を非常勤講師としてお招きして、3人で前期にやりました。

内容を簡単にご紹介しますと、最初に、いきなり劇をやりました。金性済さんは在日コリアンで、三世の方ですが、ご本人の経験を上手にシナリオにしてくださったので、それを無言劇という形で3人のスタッフと、TAの4人で演じました。これがインパクトがあったようで、学生にとっては、最初

のとっかかりとしてよかったです。

そして、さらにそれぞれの講師が自分史、自分の物語を語る。なぜそれぞれの講師がこの科目をやるのか、やらなければならないのか、そのような必然性を語る部分があったわけですが、そうしたことに最初の数回を使いました。

その後は、社会学的なアプローチ、歴史学的なアプローチから講義を重ね、映画なども観て、大教室で300人ぐらい取っていましたが、その中でできる範囲のワークショップのような形で、グループを作り、学生も作業をする、といったことを数回やりました。

それから、単発講師で6人ぐらいの方に来ていただいて、やはりそれぞれの物語、課題、個人史を語っていただきました。基本的にはすべて在日外国人の方です。韓国・朝鮮人、イスラム教の方、あるいは沖縄、アイヌ、セクシャルマイノリティの方なども招いて、お話をさせていただきました。

ある在日の女性の方は、チマチョゴリを実際に着ていただきました。話だけではなくて、可視的な形で伝わるものもあります。あるいは、絵本などの読み聞かせをしていただいたりしました。目で見ると、耳で聞く。沖縄の方は三線(さんしん)という楽器を弾いて、沖縄の民衆性を伝えるような歌を歌ってくれ、やはり非常に感動した経験があります。アイヌの女性は、ちょうど学生と同じ年代の20代の女性で、実際にアイヌとしてのアイデンティティから様々な文化的な取り組みなどもや

っている方で、その生々しい話なども、非常に大きなインパクトを残したのではないかと考えています。

そういう中で、合間合間には、リフレクションを大切に、学生には必ずコメントを書かせました。それを回収して、毎回毎回そのコメントを分析しながら、キーワードを並べていきました。スクリーンにキーワードを映していく。それについて3人の講師が論じ合う。TAの方には、学生の座っているところを下りてもらって、マイクを持って、学生とのやりとりをしていき、キーワードを各自が掘り下げるといふ作業をしました。

また、特別企画で、有志という形でしたけれども、フィールド・トリップを行いました。川崎の戸手という地域に、多摩川の河川敷に在日コリアンの方々が多住されている地域があります。そこに実際にフィールドワークとして出かけていく。これはもちろん授業とは切り離してですが、20人ぐらいの学生が参加してくれました。その経験を基にまた教室で仕上げをする。そんな形のプログラムで授業をやっております。

学生の反応としては、いろいろなコメントがありましたが、代表的なものとして、

- ・自分の中に感情があるということを見つけた。
- ・生きた声を聞くということが大学の中でできた。
- ・具体的に物語を聞きながら涙が出た。

・教室で泣くという経験をした。

・他人と違うことの意味、自分とは何なのか。自分のルート (routes)、生きてきたプロセスは何なのかということをも改めて考えさせられるという経験をした。

・・・というようなものがあげられていました。

一回一回の授業が、聴いている側が感じたキーワードによって一つの大きな物語となっていく。そういう意味では、学生と一緒に教員たちも一つの授業を作り上げていく。単に教員が知識を伝達して、学生は受容するという、銀行型、貯金型ではなくて、まさにある種の開発型教育の一つの試みでもありますけれども、一緒に作り上げていく。そういう経験ができました。

最近の若者の特徴として、無知、無関心、無感動という3要素が言われますけれども、今回の授業では、実際には学生たちの反応を見ると、多くのことを知り、関心を持ち、そして感動している。そのようなことが発見できたと考えております。

授業を終えて感じることは、私たち教員たちこそが学んだり成長したりさせられる経験が、総合Bでできたということです。教室にいるだれ一人として、自分の立っている場所を曖昧にすることを許されない。そういう緊張感がある場でした。もちろん私語などはありません。

このようなことは、実は専門の授業ではなかなか経験できません。専門は

キリスト教学ですので、「聖書」を通じてキリスト教の歴史とか神学についてやるわけですね。それは一生懸命やっているつもりですが、寝ている学生はいるし、私語もたまにある。しかし、総合Bのこの授業では、そういう学生は一人もいない。300人いても、そういうことが許されない。そういう緊張感のある場所。それがなぜできるのかということは、もう少し考えてみたいと思います。

一つは、やはり総合Bという枠組みの有効性というものがあるのだろうと思います。総合Bはやはり私たち全カリが、本当に目玉として、大切にすべき場所だときちんと押さえておきたいと思っています。

総合Aにはキリスト教の専門関連授業がありますけれども、この総合Bの授業でももちろんキリスト教とは一言も言っておりません。しかし、担当しているメンバーは私がキリスト教学科の教員で、チャプレンがいて、そして現役の牧師さんがいる。チャプレンも司祭とわかる服を着ています。単発ゲストもすべてクリスチャンです。結局、学生からすると、全員がキリスト教関係者であるということがよくわかるわけです。しかし、授業のなかでは「聖書」も開かないし、キリスト教のキの字も出しません。それでも、私たちが何を伝えたいかということを、たぶん学生たちは分かってくれたと思うんです。

後からスタッフの間で、総合Bのこの授業こそが、実はキリスト教教育な

のではないか、これこそが専門の授業ではないかという話をしています。立教でのこれまでのキリスト教教育は、聖書を語り、キリスト教の歴史を語り、神学を語っていたと思います。ミッションスクールの建学の精神ということで、かつてキリスト教倫理が必修であった時代もありましたけれども、そういうことだけではなくて、まさに学生たちが感じたり、共感したり、涙を流したりする中で、自分自身を確かめていくことができる。あるいは、価値というもの、共に生きることの中身を深く考える。これが実は真のキリスト教教育なのではないか。そしてまた、それこそがいわゆるリベラル・アーツではないのかと最近では考えるようになっていきます。

ですから、この全カリの総合Bと専門を比べると、実は総合Bのほうが私たちにとっては本当の専門なのではないかという気もしていますし、実際に、総合Bを受けた学生が専門の授業を受けたときに、より理解が深まっているということも、少し経験しています。もともと文学部はカレッジ・オブ・アーツと言うぐらいで、リベラル・アーツですから、全カリと文学部の教育とは、線を引くことは非常に難しい。だから、曖昧だということはありますけれども、それはそれで良いのではないかと今は思っています。むしろかたに運動できるかということを考えていきたいと思っています。

そして、決して専門用語を使わない

で、どれだけ本質に迫れるか、本質を伝えられるか。易しい言葉で変換するのではなくて、どれだけ本質的なところで専門用語を使わず伝えることができるかというチャレンジを、総合の展開において、教員は受けるわけです。そういうことでは、教員にとっても大きな経験になります。学科の専門の授業ですと、君たち、これぐらいは知っておいて当たり前だろうというかたちで語りがちですが、全カリはそういうことが許されないために、より本質的なところで展開しなければならないということが言えます。

今後の可能性や課題ということでは、すでにスポーツの研究室のほうでフィールドワークをやっていただいています。人文研の総合Bの中でフィールドワークの夏季集中などといったものを、私としては考えてみたいと思っています。実際に来年、提案したいという企画もあります。そのような形で、教室の枠を越えた可能性も、この全カリ、総合Bではあるのではないかと考えております。

そして、逆に言いますと、総合Aの方が少し大変なんですね。何が大変かといいますと、コマの圧縮がこの間なされてきたため、やはり非常にバラエティに富んでいた内容が、総合Aの方では逆に圧縮せざるを得なくなっている。人文研に関して言えばそうなんです。そして、非常勤コマが大幅に減らされているので、バラエティという意味でも、内部的にも、難しい展開にな

っています。

学部の専任教員の担当ルールというものがあるために、実際に専門でご貢献いただきたい先生に授業をお願いできない。そういった非常にねじれた状態が起こっています。これこそは立教大学にとって致命的な問題になるのではないかと考えておりますので、そのあたりのことをやはり全学的な課題として考えていきたいと思っております。

文学部講師
全カリ人文科学教育研究室室員
星野 宏美

私は文学部ドイツ文学科所属ですが、全カリの音楽担当教員としてこの4月に着任しました。全カリのコマを年間で7コマ持っている他、独文で2コマ、文学部共通で1コマあります。文学部でも、音楽の専門の授業をするわけではありませんから、私にとって全カリと文学部のコマの間で何か相違があるかということ、基本的に全くありません。

ほやほやの新任でして、全カリの歴史を皆さんと共有していないという点、また、私自身が音大の出身であるという点もまた特殊かと思っております。

私は芸大という特殊な分野のエリート教育を担っている機関に16年おりました。それまでご縁のなかった立教大学に今回来ました。一般大学のしくみも、全く知らなかったもので、今でも戸惑いが多いです。今日は、せっかくの

機会ですので、私という、おそらく極めて特殊な人間が、この1年弱、全カリの授業を担当して感じたことをなるべく率直に具体的にお話ししたいと思います。今日のキーワードは専門ということですので、それに引きつけてお話ししたいと思います。少し悩み相談のような性格があるかもしれません。

実際的な問題として、私が最も困難に感じているのは、クラスの学生数です。音楽の授業は、固定した教室で行いますので、人数制限科目になっています。教室いっぱい入って135名ですが、現時点での平均は80人ぐらいです。実はこれは、私にとっては大人数です。全カリでは数百人から千人のクラスがあるそうですが、私には全く想像できません。私自身は職業柄、2000人のコンサートホールでのレクチャー・コンサート等はしますけれども、やはり授業とそういうものとは違うと考えていました。

私が今まで考えてきた、あるいは実際に受けてきた授業は、多くて20人から30人。例外的に50人ぐらい、通常はだいたい10人から15人、あるいは5人以下というのも珍しくありませんでした。芸大では専門ではない、全学に開かれた授業であっても、そのような規模でした。もちろん芸大は実技中心、個人レッスン中心の大学ですし、学生数自体が少ないので、少人数授業が可能なのだらうと思います。

私は、ドイツでも勉強をしましたが、1990年から1992年に留学していたベル

リン自由大学での体験をお話したいと思います。当時は東西の壁が開いたばかりの混乱の時期で、大学も、ヴィザの関係で入学したいという人々であふれ返っていました。科目や講義によっては、それこそ何百人、千人というクラスもあったそうですが、音楽学は、医学等と同様に人数制限が設けられており、むしろ芸大より小規模な授業を展開していました。大学における音楽教育は、やはり少人数であることが必要なのではないかと思ったりします。私が今まで恵まれた環境にあっただけといえば、そのとおりなのですが。

もちろん私も、大人数授業を全く経験していないわけではありません。私立の音大の講師として、100名程度の必修授業を担当していました。これはだいたいどの音大でも同じですが、音楽史を前半と後半に分けて2年間、必修で学ばせるわけです。だいたい120人ぐらいまでは1クラスにして、それを超えると2クラスに分けるといふ方針もどこの大学でも共通です。

人数的には、立教の全カリの音楽と同じですが、音大の必修科目ということで、基本的に教えることは決まっています。教師の自由裁量の部分もありますが、音楽史の基本内容は変わりませんし、また、到達すべき目標も定められています。また、音大入試をえているので、学生一人ひとりの前提が平均化されています。そして、必修の1年目を終えて音楽史前半の単位がもらえたら、音楽史後半に進むという、シ

ステマティックな科目運営がされています。

ここで私の抱える次なる問題が出てくるのですが、立教大学の全カリの音楽では、人数が私の理想に比べて多いだけでなく、学生の前提にばらつきがありすぎるということです。知識だけでなく、あるいは関心や期待も多様です。

こうした状況下、初心者はこの授業、中級者はこの授業、上級者はこの授業と分けられれば合理的ですが、そうはいかない。というのも、現実問題として、多くの学生は、空き時間に音楽をやるという認識だけで私の授業にやって来るわけです。シラバスにはきちんと授業内容を書いているのですが、それを読んでいるのか読んでいないのか、お構いなしです。ですから、初心者はこちらに来なさいと言うこともできない。これが終わったら、次はこの授業を取ったらいいという連還を持たせることも難しい。

音楽史は、本来は少なくとも2年間かけて学ぶ科目です。その前半を前期にやって、後半を後期にやるぐらいのことはできないかとも思うのですが、それもやはり不可能です。

現在、「音楽の歴史」を前期に1コマ、後期に1コマ持っています。前期に前半をやって、後期に後半をやるとすると、学生は「音楽の歴史」を2コマ取ることになるのですが、1コマ目は単位になるけれども、2コマ目は、内容が違って、科目名が一緒だと単位にならないということです。単位に

ならなくとも授業の続きを聴きたいという学生は、残念ながらそれほどおりません。単位の取り方も、授業のシステムティックな連還性とかかわってくるのではないかと思います。

もちろん音楽好きの学生もいて、単位にかかわらず授業を取ってくれます。一学期の間に2コマ、3コマと授業に出てきて、個人的に会話もして、彼らの関心や期待も具体的にわかってきます。しかし、授業はどうしてもその他大勢の不特定多数が対象になるので、結局、基本事項をすべての授業で繰り返すことになります。複数の音楽のコマを取る学生は、同じことを、それも基本事項を繰り返し聞かなければいけない。彼らとしては、もっと専門的なことを知りたいからやってくるのに、その期待になかなか沿えません。

この状況下、音楽の授業はどうあるべきなのでしょう。あらゆる授業に入れ替わり立ち替わり現れる不特定多数に対して半期という制限された時間内にいったい何が教えられるのか、非常に難しいところです。

結局、一回一回完結するすぐにわかっておもしろい授業をするのがベストなのかとも思うのですが、それでいいのだろうかとは私は考えます。

専門教育ではない、音楽家を育てるわけではないことは、重々承知しています。しかし、当たりさわりのないことを教えることに意味があるとは思えませんし、中学、高校の教育の焼き直しにも意味があるとは思えません。テ

レビやラジオの音楽講座、単発のレクチャー・コンサートと同じようなことをやっているだけでいいのだろうか。大学における教育に、私の考えでは、蓄積や継続性が必要です。それを実現するのは今の状況では難しいというのが、私の悩みです。

今回はネガティブな面を強調しましたが、自分の専門をいかに不特定多数に伝えていけるかということは、私にとって大きな挑戦ですので、長い目で頑張っていきたいと思います。

法学部教授
全カリ社会科学教育研究室室員
橋本 博之

法学部の橋本です。私は社会研の所属になります。私が担当しているのは、新座の「日本国憲法」です。総合Aに含まれますが、教職科目ということで、そういう意味では、内容的にはあまり全カリとして特別変わったこともないといえますか、おもしろさということはないわけです。ただ、やはり私も新座へ出かけて行って、非常にいい経験になったなと思います。

もちろん日本国憲法を教えるといっても、2単位、半期1コマだけを教えます。新座の場合は、社会福祉関係やいろいろな法律の科目もほかに展開されているわけですが、しかし、法律学特有の言語とか体系性を使って本格的にやるということにはならないわけです。ただし、その分、新座だからなの

かもしれませんけれども、少人数で授業をやることができるということがあります。非常にインタラクティブな授業ができる。

それから、法律学の教育方法として、ソクラテスメソッドというものがあるって、一方的に先生が教えるのではなくて、具体的な問題を学生に投げ掛けて、それで議論しながら、より議論のレベルを上げていくというやり方があります。そういうやり方が、全カリだからできるというところがあるような気がします。

新座で教えている場合、学年が非常に多様でした。3年、4年の学生がけっこういて、福祉関係などいろいろ社会活動をしている学生がいたりして、そういう意味では、私にとっても刺激を受けております。

やり方ですが、もちろん基礎的な考え方を示す。日本国憲法をやるのですが、たった一コマしかないのですが、例えば、人権を教える場合は、法律学の教育というより、私自身の法律家としてのアイデンティティ、今まで10年、20年という単位で法律家ということで社会的活動をしてきたわけですから、法律家としての私に学生には関心を持ってもらって、学生のほうからたとえば聞きたいこと、議論してみたいことを出してもらって、みんなで議論していくというようなことをやろうということで、始めました。

したがって、やり方は、いつも出るのは30人とか40人ぐらいだったの

で、星野先生のお話とは対照的に名前をこちらにも全部覚えて、必ず授業では一度はしゃべることを約束ごとにしてやる。事例を取り上げてやるわけですから、表現の自由とか、生存権とか、身近なケースで具体的な事例、最近のハンセン病国賠訴訟などを取り上げて議論するというので、ずっとやっていきます。

新座は、池袋とはずいぶん雰囲気違って、今は4年までいますが、すごくアットホームな感じで、ちょっと刺激がないと言えないのですけれども、そういうなかで、教師としてはやりやすいというところはありました。逆に、全員に発言することを義務づけると、なかにはやはりしゃべることにストレスがある、プレッシャーがあるような学生もいたりします。そういう学生をどのように扱うか。みんなと同じように発言させたり、議論させたりしていいのかというところで、もう少し方法が必要かなと思ったことがあります。

学生の反応も、男性ですと、少し慣れてくると、何とかきょうは橋本をやっつけてやろうという感じで、いろいろ食ってかかる人がいたり、けっこうおもしろかったですね。ただ、全体の感想としては、どうしても法律の世界は生の現実がボンと出てきて、お互いの立場があるわけですから、そう簡単に白黒決着はつけられません。そうすると、結局、いろいろ議論したって単純な答えは出ないのではないかという

疑問がありました。私の立場としては、結論は出ないけれども、議論の質、方法的にも法学的な方法に近づいてほしい、そこをマスターして欲しいと思うのですが、なかにはいろいろ言い合っただけで結局、法律など結論が出ないものだという感想を持った人もいました。そういう感想を持つ人が多かったようで、そのあたりは少し工夫が必要かなと思ったりしました。

法律家としての自分、あるいは法律家ということ、たとえば人権問題など自分なりに社会とかかわってきているわけですが、何か立教大学全体の雰囲気として、法的な議論がマイナス・イメージで扱われているのではないかと残念に思うことがあります。法律家は個々の法的問題を社会的な運動でやってくるのとは、立場が違うわけです。でも、もちろん依頼されればどちらの側にも立つけれども、そういうなかで紛争を扱ったり、人権を守っていきたくて考えているわけです。そのあたりの方法みたいなものをもう少し全カリの中で展開できればいいなと思いました。

あとは、課題というか要望のようなところですが、私も新座の授業はこれで終わり、来年からは池袋のほうでやることになります。そうすると、やはり法律とか経済の授業は、どうしても大教室で授業をすることになるかもしれないので、そのあたりを少し工夫してもらいたい。それと、学年のばらつきがあると、すごくいいなというこ

とを新座で考えたので、3年とか4年とか、そのあたりがうまく教室のなかに混ざる、あるいは3年、4年をターゲットにした科目の設置のようなことを工夫していただければいいのではないかと思います。

理学部教授
全カリ総合A群科目担当者
柴崎 徳明

私は「宇宙の科学2」を担当しています。数式なしで何かを伝えないといけないので、なかなか難しいです。ですから、目的としては、ああ、こんなことが宇宙のなかで起こっているんだなということが、ほんやりとでもいいから伝わり、楽しんでもらうことを第一目的にしております。学生にとっては、宇宙は知的好奇心の対象のようで、かなり興味を持って聴いていただいております。

どんなことをやっているかという点、授業は主に二つの核から成っています。まず、人間の宇宙観の変遷を話しております。たとえば紀元前4000年ぐらいですか、エジプトとかメソポタミアでは、人々はどのような宇宙観を持っていたか。自分の住んでいる土地を反映し、宇宙の中心には川が流れているといった宇宙観から始まります。アリストテレスの天動説、コペルニクスの地動説、ケプラーの法則、初めて望遠鏡を用いたガリレオの観測、ニュートン、ハーシェルとすすんで、銀河

宇宙にたどりつきます。数式なしですから、私は図を多用しています。

コピー室で図をコピーしてもらいますが、あれは非常に助かっています。原稿を渡すと2~3日で届くわけですから。もう一ついいのは、履修者が300人を超えると、TAやSAがつかず。その人にいろいろ手伝ってもらえるんですね。私の授業への出席者は、部屋の大きさでリミットされ、190人から200人程度です。これくらいの人数になりますと、コピーしたものが何箱にもなります。それを私が持って行って配ると、けっこうそれに時間をとられます。TAなどは200人、300人に達しなくてもつけていただくと助かるなと思います。

いま宇宙観の変遷について述べましたが、こうした歴史的なものは、私たち専門科目のなかではなかなか展開できないところですよ。やはり個々の科目を教えることが多いです。たとえば統計力学、あるいは電磁気それぞれ自身を教えることが多く、人間がどのように発展させてきたかという歴史的なことは、ほとんどありません。ですから、全カリのこの科目は、理系の学生にとってもいいものになっているのではないかと思います。

二つ目の授業の核となるものは、やはり現代の宇宙像です。今、私たちの宇宙がどのように理解されているのかについて話します。まず、宇宙はどのように作られたのか、から入ります。宇宙は真空のゆらぎからできたとか、

あるいは真空のエネルギーを使って宇宙は膨張を始めたとかは、理解できないと思いますが、構わず言います。それで、何かを感じてもらえればよいと思っていますのです。次に、銀河ができて、星ができて、惑星ができて、そして、宇宙はどういう終わり方をするのだろうかといったことを話します。

これは理系の学生にとっても、わかりやすいと聞いています。なぜかという、数式を使わないからです。あともう一つは、宇宙の全体像をつかみ易いためと思われるます。

最後に、授業を進めるうえで一つ気をつけていることがあります。宇宙というと、私と宇宙というのはかかわりがないものだと思っているんですね。私の外に宇宙がある。あるいは、宇宙という入れ物のなかに私たちはただいるだけで、私と宇宙は別物だと感じている人が多いようです。やはりそこはそうではなくて、私たちは宇宙のなかの一部であって、宇宙と私たちはすごくかかわり合いがあるのだということを、なるべく伝えるようにしています。

たとえば、一つとしては、太陽はいま46億歳だ。あと50億年過ぎると膨れてきて、私たちの生命はなくなるんですよと言います。しかし、50億年では、やはり私たちとはのかかわり合いが感じられないようです。そこで、また別のことで言います。たとえば、私たちの体は何でできていますか。私たちの体は、たとえば酸素、窒素、ある

いは炭素でできている。こういうものはどこにあったかということ、昔、みんな星で作られたものです。あなた方は星と全く関係ないと思っているかもしれませんが、あなた方の体はすべて星のなかでできたのですと言うと、やはり感動するようです。ですから、なるべく私たちと宇宙のかかわり合いにも心を配りながら授業を進めております。

授業の中で、私たちは専門用語を何気なく使ってしまう。たとえばパルスなどという言葉を使い、みんなわかっていると思って話してしまうんです。そうすると、後で、授業が終わって質問が来ます。パルスって何ですか。うわあ、失敗したと思います。そのようなことが多々あります。

ですから、全カリの授業は、私にとって、宇宙物理あるいは物理学に対する私の理解が非常に問われているものであり、いつも努力しなければいけないと思っています。

文学部助教授
全カリ自然科学教育研究室室員
堀 耕治

私は今日、全カリと専門の間に関連するようなことについて、ずけずけとものを言えばいいんだ、この際日頃の不平不満を言ってしまうおう、というような感じで来ました。実は、今お伺いしてきたような、授業の現場でどういふことをやって、学生の反応がどうか

といったことについては用意してきてはいなかったのですが、その点について、まず、最初に少しお話したいと思います。

私は「心の科学」を担当しています。「心の科学」は心理学の初歩をわかりやすく教える科目と理解しています。実は、私にとって役に立っていると思いますのは、専門のほうで「心理学概説」という講義があります。これは通年科目で、心理学のベースの知識がない人に心理学の全体像をショーケース的に講義する科目です。これは通年科目ではありますがけれども、要するに、半期科目が二つあるんです。ところが、「心の科学」は1から4までありまして、ですから、全部聴けば、全体像を四つの科目で構成することができるわけです。ということは、少なくとも単純に考えると、2倍の話が心理学の初歩的な部分でできるわけです。

ですから、専門科目と非常に初歩的なレベルの中間的なところを講義することができる科目としてとらえることもできて、専門でさらに進んだ話をするときのテストケースとして使えている部分があります。学生の反応などを聞いて、自分の専門での講義に役立てることができているかなと思っています。

さて、これから先は、不平不満の部分になってきます。

立教に来て2年目です。去年も今年も全カリの科目を担当しているわけですが、日ごろ心理学の教員の間で全カリの「心の科学」について話題になっ

ていることを考え合わせて発言したいと考えました。

まず立教に来て感心したのは、全カリという形で、旧一般教育が非常に充実した形で学生に提供されていることに、私は非常に打たれました。といいますのは、私の前任校は私立の医科大学でした。小規模な医科大学はたいていどこでもそうですが、非常に切実な問題があります。それは何かというと、資格試験から競争試験へと変わりつつある医師国家試験の合格率を上げることが、非常に大きな命題になっています。学生を確保するために、合格率を上げることが、私立の医科大学にとって死活問題なわけです。非常にいびつな形で大学教育がなされていくような流れにあるという、印象がありました。

その一つの表れが、一般教育の軽視です。ほとんど技術的な教育しかなされていないような気がしていました。ほとんど解体状態と言ってもいいぐらい、一般教育がおろそかにされているという現実があったわけです。要するに、医学の技術的なことしか知らないような医者が大量にどんどん養成されていくという危険性すら、覚えました。そういう状況を見慣れた者としては、立教に来て、全カリの充実ぶりを考えると、ほんとうにすばらしいと思いました。

ただ、いいことばかりかということ、システムとしても、確かにシラバスなどを拝見して講義内容を読みまして

も、本当にすばらしいわけですが、いくつか問題点も感じます。一つは、それだけ非常に充実しているわけですから、これに対して事務の方々、教員の方々が投入しているエネルギーは、莫大なものがあります。しかし、学生の履修意欲との間に、ちょっと温度差を感じるわけです。

これは私自身が講義を担当して感じる部分もありますけれども、学科の学生と常日ごろ接して、全カリについて彼らが語っていることを聞くと、どうもさほどの受講意欲を感じない。つまり、語弊はありますけれども、これだけ投入しているわれわれの努力のありがたみが、学生にはさほど伝わっていないのではないかという気が実はしています。もちろん個々の授業、おもしろい授業について、意欲を持って授業に出るというものも、学生によってはあると思いますけれども、押し並べていえば、楽勝科目はどれだということ科目を選択している傾向に表れるようなものがある。そういう傾向があるのは残念だなと考えています。つまり、全カリの存在意義について、学生の理解がどうももう一つ不十分だという感じがしております。

もう一つの問題点は、専門教育を多少圧迫している部分があるということを感じます。少なくとも心理学科の専任教員の間では、その圧迫をかなり強く感じています。「心の科学」の現状を申し上げますと、今年度は24コマあります。非常勤コマの投入でご配慮

いただいておりますが、それでは心理学科の教員全員が少なくとも一つのコマを担当しています。今年是这样い状況です。

次年度は、展開コマ数がさらに増えまして、27コマになります。ただ、関係各方面のご努力によりまして、専任の責任コマ数は実は一つ減りました。非常勤のコマを増やしていただいて、これは非常にありがたかったのですが、しかし、焼け石に水で、全カリの負担が非常に大きいために、その結果、専門教育科目のコマの展開に実はしわ寄せが来ております。かなり苦しい圧迫をされているという思いを、心理学科の教員の人は持っています。これは事実であります。

もう少しコマ数を整理できないかということ、折りにふれて申し上げます。別に公的なところで申し上げているわけではありませんが。そうしますと、返ってくる答えは、履修者が多いとおっしゃるんです。確かに履修希望という形で学生のニーズが高いことはもちろんわかるし、それにできるだけ応えていこうという姿勢は、非常に大切なことだと思います。しかし、一方で、彼らのニーズだけでいいのか。「だけは」、は言い過ぎかもしれませんが、われわれ教員の側が彼らに何を学ばせたいのか。これを学ばせたいというものをもっと強く押し出してもよいのではないかという気がしています。

つまり、履修者は少ないかもしれないけれども、これは大事だ。そういう

ものが絶対あるはずです。そういうものにもっとコマを展開していくということも、必要ではないか。もしそういう配慮なしに、ただ学生の履修ニーズに合わせていくのは、非常に言葉は悪いのですが、単なる迎合ではないかという気がします。

これは決して心理学科のお家の事情だけを語っているわけではなく、どの科目とは申しませんが、非常に大事であろうと思われる科目で、全カリの科目展開に欠けているものがあります。この大事な学問をどうして全カリという形でないのか、不思議に思っているものがあるわけです。本来、これを学ばせたいのだというものには、もっとコマを展開して、要するに、われわれ教員の主体性というものをもっと打ち出していくべきではないかという気がしてなりません。

そういう問題点を踏まえて、私なりに全カリについて、こうあったほうが良いと思うこと最後にをまとめてみます。

まず、学生に全カリの意義が十分理解されていないということです。全カリとは何なのか、全カリの教育とは何なのかということについての啓蒙が、学生に対してもっとあって然るべきではないか。つまり、リベラル・アーツとは何かという科目。リベラル・アーツの歴史的意義、現代的意義といったことをまず学ばせる。そういう科目があって然るべきではないかという感じがしています。

次が、専門教育へのしわ寄せ、われ

われの主体性の問題に関しては、まず第一に、何を学ばせたいのかという視点からのコマ展開の見直しを行って欲しいというのが一つ。もう一つは、専門教育との有機的な連携がもっとあってもいいだろうと思います。具体的にいえば、全カリのコマ展開に関して、学部・学科からの意見をもう少し吸い上げていいと思います。その場合、たとえば学生に対しても、各学科でこういう全カリの科目を取っていると専門教育のために役に立つというような、推奨科目を各学科、各学部に挙げていただく。さらに積極的にいえば、履修モデルというようなものを学生に提示する。各学科の履修モデルを提示してもよいのではないかという気がします。

たとえば心理学科でいえば、情報関連の科目、数学、生物学といったものがたぶん推奨科目として挙がってくると思います。それぞれの学科によっていろいろな科目が挙がってくると思います。具体的にいうと、私の場合は心理学科で統計法を講義しています。ところが、実際、統計法を心理学科の学生に教えてみると、かなり啞然とします。数学とも言えない、四則演算、算術ができない学生がいるんです。専門科目としては、そういう基礎的な部分への対応はなかなか難しいんです。そういうわけで、むしろそうした初歩的な数値処理、あるいはグラフの描き方といったものを全カリでアレンジできれば、すごく役に立つだろうという感

じがしています。

もう一つ、これがなぜないのだろうという科目があります。伝統的ではあるけれども、重要な科目。履修者は少ないかもしれないけれども、重要な科目というものは、履修希望の数がどうあれ、やはりコマを設定しておくべきではないかという気がします。

経済学部教授
全カリ情報科学教育研究室主任
長島 忍

今回、「全カリと専門とのあいだ」ということでテーマが設定されております。私は専門の授業を前期しか持っておりませんので、非常に困ってご相談したのですが、自分の担当している授業のことを紹介してもらえればいい、と伺いましたので、自分がやっている授業について簡単に紹介させていただきます。

今日説明するのは「情報科学」という授業です。だいたい150人から200人ぐらいの学生数の、講義形式の授業で、実習の授業は「情報処理」になりますが、今回は「情報科学」、講義のほうについて紹介させていただきます。

この授業で目指したことは、自分で工夫したことは、まずなるべくわかりやすい授業にしようということで、プロジェクターを毎回使っていますが、今学期の授業は、説明のための図を作りました。毎回の授業でだいたい20枚ぐらいの図を作りましたので、半期、全部合わせると250枚ぐらいの図を作

りました。これについては、また後でどういう図を作ったか、いろいろ見てもらおうと思います。

授業の内容がマルチメディアに関することですので、音とかビデオといったものを使っています。昔ですと、たとえばビデオならビデオデッキを入れるのですが、最近はファイルにしてパソコンに入れておきますと、そのまま音とかビデオが流せますので、そうした意味でたいへん重宝しています。

授業で難しい概念をわかりやすく説明するために、アニメーションのプログラムなども作りました。

次に工夫したのは、なるべく学生の興味を惹く授業ということで、一方的に話をすると学生のほうは聴くだけなので、話の途中でクイズなどを入れて、3択のクイズをやって、1番、2番、3番それぞれ手を挙げさせて、正解は実はこれですという感じで、学生たちが参加しているという意識を持たせたりしました。

それから、授業の理解を促すために、毎回、演習問題を配ります。これは右半分に問題があって、学生はそこにまず解答します。左側にそれを写して、ちょっと面倒臭いのですが、学生に切ってもらい、左半分を提出してもらって、出席の確認や理解度の確認に使っています。右側の下のほうに前回の解答をつけておきますと、学生が前の分の解答を持っていれば、自分で採点することができます。

工夫しておこなっているのはこのよ

うなことです。

この授業を後期やっていますけれども、いちばん特徴的なことは、説明の図をたくさん作ったので、図が多いということです。それから、先ほどの問題で、簡単なアンケートといいますか、毎回質問や意見がある人は書くようにということにしていますので、授業でここがわかりにくいとか、質問があれば学生はそこに書いてくれますので、後でその部分をまた説明し直すといったことをしています。

図が多く、音やビデオを使って、たいへんわかりやすいという学生の意見がありました。一方で、ノートがとりにくいという意見もありました。プレゼンテーションを速くやっていると、学生がノートをとれなくて、後でもう一回映してくださいとか、いろいろ言ってきます。いい面もありますし、問題点もあります。

全体的なまとめとしては、授業の内容がマルチメディアに関連したことをやっています。実際の授業のプレゼンテーションでも、マルチメディアをできるだけ駆使して、できるだけわかりやすい、学生がなるべく理解してくれるような授業をやるようにしています。

これは実際に授業で使っているプレゼンテーションです。左側に並んでいるのが、この授業の項目で、これを順番に見ていくと、説明の図が出ます。それを説明しながら順番に見ていきます。このような感じでやっています。あとはPDFファイルにして、また見

たいという学生にはホームページで見せたりしています。

だいたいこのようなところです。少し皆さんと趣旨が違うかもしれませんが、自分の授業の紹介ということでお話しさせていただきました。

コミュニティ福祉学部助教授
全カリスポーツ健康科学教育研究室員
沼澤 秀雄

スポーツ研究室の沼澤です。今回は、スポーツ研究室がこれまで取り組んできたことを紹介します。

全カリのスポーツ研究室の取り組みは、いろいろなところで紹介されています。この資料は、今年の日本体育学会のシンポジウムで使った資料です。この他にも、全国大学体育連合で企画された「映像を使った授業」という研修会で、総合Bで実施している「メディアとスポーツ」を紹介させていただいたりもしています。

今年は「大学における教育評価の考え方」というのがテーマとなっていましたので、教育評価の位置づけを、教員の自己点検評価のなかの教育評価、学生アンケートを集計した授業評価としての教育評価、全カリから見てスポーツはどうあるべきかという評価など、いろいろあると思うのですが、それに対して、スポーツ研究室ではどのような取り組みをしたかということをご報告させていただきました。

日本体育学会の50回の記念大会で

は、全カリの初代部長であった寺崎先生が招かれてお話をされたことがあり、そのとき、立教大学の全カリで行われているスポーツの授業ということで紹介していただいたこともありました。

さて、一般教育部の時代、体育科は学生に対してどのようなことを行っていたか、学内で理解されていないのではないかという危惧がありました。そこで、冊子を作って、当時の専任教員全員にお配りしたということがありました。

また、当時、体育科では学生にアンケートをやりました。体育の授業は楽しいですか、実技が必要だと思いますか、講義は必要ですかといった項目がありました。半分ぐらいの学生は、楽しい、体育の実技は必要だと答えています。

しかし、講義の方はそうではないというデータも出てきました。講義科目は、いま総合 A でやっていますが、かなり履修者がおり、26%の学生が来ています。

スポーツ研究室としては、4年に1度はスポーツ関連科目を受講してもらえるようなコマ数を確保すること、そして、実技と理論を合わせて、頭と体でスポーツを理解してもらおうということで、スポーツスタディという科目を作りました。それから、多様な実技種目を展開しようと、いろいろな種目を作ってきました。総合の科目も、「総合 A」、「総合 B」、「多彩な科目」

と多様になりましたが、これらに積極的に参画していこうという方針で取り組んでいます。

一般教育部時代の必修のカリキュラムのときには、体育実技1が1年生のスポーツ実習、体育実技2は2年生が履修していました。当時は新座で体育実技1を各学部1日利用という形で展開しており、体育実技2は池袋で展開していました。講義科目は必修で半期の保健体育講義を行っており、合計260コマ程度展開していましたが、全カリが始まってからは、スポーツ実習137コマ（内4コマは試験的に開講している科目）、総合 A、総合 B、多彩な科目を加えて、今年は156コマ（内4コマは試験的に開講している科目）の科目を展開しています。コマ数からすると激減してしまっているということがいえます。

科目の多様性については、必修で行っていたときには19種目を展開していました。全カリが始まって新たに始めた種目として、マリンスポーツ、ボディシェイプ、ダイエットフィットネス、セルフケア体操などがあります。インラインスケートは場所の問題で新座で実施することにしました。

次は、スポーツスタディとスポーツ実習について学生アンケートをとって比較してみたものですが、いくつかの項目で差が見られました。スポーツスタディは2単位科目で、学生にとってみると、偶数で2単位ずつ単位を取っていったほうが効率的だということも

ありますし、半期で2単位取れるという魅力もあると思うのですが、この科目は、将来の役立ち度、日常の体力づくりとスポーツ、生活化への貢献、教材の適切性といったところで高い評価を得ており、一方、授業内容に一致しているかどうか、満足度、達成感といったものに関してはスポーツ実習のほうが高くなっています。おそらく、スポーツ実習は思いっきり体を動かさせていいというような部分があるのでしょう。

総合Bで展開している「メディアとスポーツ」は、服部先生と私とがずっとかかわってやらせていただいているのですが、そのなかでもやはりアンケートをとって、いろいろな項目に関して聞いています。おもしろいと思ったのは、全体的にいい評価を得ているわけですが、特に、この期間を通じて常に出席しようと心掛けた、真剣に学ぼう、他の学生にも勧めたいと思った、といった答えが多くありました。しかし、この科目は、700、800、1400人といったかなりの大人数科目になってしまっていて、実際は半分ぐらいしか来ていないわけです。したがって、授業に出席する学生は一生懸命やるけれども、欠席する学生も多いということです。また、大人数科目でやっていると、やはり、コミュニケーションがとれなくなるということが、どうしても出てきてしまいます。大人数科目の弊害のようなものは、1年目からずっと残っていて、何とかやりたい学生にだけ取

らせるような方法はないか探ってもらっているのですが、なかなか今のところよい方法が見つからないというのが現状です。

また、今年度、スポーツ研究室を中心にウェルネス研究所を立ち上げさせていただきました。立教学院全体の構成員の健康をもう少し大きなとらえ方でアプローチしようということで、小中高大学の一貫教育をウェルネスの立場から推進する。また、地域に開かれた立教学院スポーツクラブを設置できないか、産・官・学の連携による共同研究やセミナーができないかなどを検討しています。なぜここでご紹介するかというと、来年からウェルネス研究所で総合B科目の「スポーツイベントを考える」という授業を担当することになっており、こういう活動もこれからの課題です。

もう一つ、全カリと専門というテーマでお話したいのが、スポーツ研究室の教員は、全カリ科目のスポーツ実習を中心に授業担当が決まっていて、そのなかで総合A、総合Bなどいろいろな科目をやっていますが、一方で、それぞれ学部にも所属しており、学部の科目を担当していくということが今後出てきます。そうすると、余裕を持って全カリに臨めないということになってきますから、全カリ担当コマの割合に関しては、少し考えていただきたいと思っております。

スポーツに特有な問題としては、やはり施設の問題があります。池袋の狭

い校地のなかでスポーツの科目をやっていくときには、施設が必要なわけですが、現状は本当に目一杯の状況ですので、何とかしなければいけないと考えています。新座キャンパスを有効に使えばいいのですが、スポーツの科目のみのために、武蔵野新座に行くというのは、なかなか難しいことで、そのあたりをうまく調整していかなくてはならないと思われます。

専任教員については、私が立教に入ったころは12名いた専任の教員が今は6人ということで、来年は5人になるところでしたが、1人来ていただけることになって、6人ということです。全カリの教育に加え、様々な学内業務ができています。現状の専任6名の体制でよいのか。また、この状況で学生に対してどのような教育ができるのか、がスポーツ研究室としての課題となっています。

経済学部教授
全カリ社会科学教育研究室室員
鈴木 秀一

私の担当している「社会科学演習」および「企業と社会」についてレポートしたい。

○社会科学演習について

(1) テーマと文献

全学部からの参加者によって、議論する場を提供するという全カリの新しい試みは、まずまずの成功を収めたと

自画自賛している。テーマは参加者と話し合って決めたが、教師の誘導による部分が大きい。文学部から理学部までを想定して、技術文明や産業文明という文明論をテーマに文献を読むことにした。

ウェバーの『宗教社会学論選』から「序言」を読み、近代西欧文明に固有の合理性概念についての解説からスタートした。ウェバーの合理性概念から、法律、政治、技術、科学、建築、音楽、宗教など西欧文化一般について議論を広げて、全学部にとっての共通項をもたせた。その後、学生の側から自然に「西欧だけが合理性をもっているという考え方はおかしい」という議論になり、日本社会やアジア文明についての議論をすることにした。ゲストをお招きして日本社会論を議論し、後はゲストを囲んでのコンパを設定した。これも相互に議論する雰囲気づくりに有効だった。その後、コンパは数回あり、現在も学生たちと「全カリゼミOB会」がほぼ毎月続いている。

さて文献は最終的には「文明の衝突」(ハンティントン)とその批判論文を読むことになった。前期ゼミの論文集のタイトルが「文明の共存をめざして」になっているのは、演習生たちの世界の文化的多様性を「衝突」に結びつけずに、むしろ生産的な共存を願う気持ちの表れである。

(2) 授業風景と改善案

議論は非常に活発であり、理学部生

は残念ながら今回は参加者がいなかったが、文学部、社会学部、法学部、経済学部からの1年から4年次までのバラエティがあったのもよかった。新座との交流がもてればもっと有益な議論ができたと思う。

これだけの多様な学部生が、学年をこえて、またクラブやサークルと違ってタテの人間関係もこえて、ストレートに議論できたことは、貴重な経験となったという声が多い。

改善すべき点は、議論に慣れていない学生たちが、稀にはあるが、特定の宗教や価値観あるいは人格的な攻撃に走ってしまうことがある点である。

これは4年生や3年生から、やんわりとたしなめられたが、ゼミでもサークルでもない匿名に近い学生同士が議論に熱が入ると暴走する場合がある。教師の側のタイミングの良い交通整理が重要だ。

また、前期に6回のレポートを提出させたが、添削が間に合わず、不十分な添削や感想で次週に本人に返したこともあったのは反省点である。学生は、こちらの添削の本気の度合いを敏感に感じ取る。自分の考えをまとめる、みんなの前で話す、そして論理的に書く訓練を基本にしたが、最後の目標は充分ではなかったと思う。

○「企業と社会」について

(1) テーマ

社会制度としての企業について、経済的利潤だけでなく、地域社会への社

会的責任あるいは従業員へのキャリア開発を通じた生きがいの提供などを講義してきた。社会からみた企業と、企業からみた社会（経営戦略）の2つの観点を講義している。

先週のアンケートによれば（350名弱回収）、2つのテーマのバランスは学生には適度に感じられているらしい。もっと個別企業のケースを扱って具体的に教えてほしいという法学部4年生の声もあったが、前回、それは半期の科目では答えられないと説明した。

(2) 講義風景

5122教室で、出席者は毎週400名弱である。TAが1人、常時、教室後方で私語や携帯電話のメールで遊んでいる学生、語学の予習の学生などを注意して歩いている。半期に2度、学習の定着度をみるためにミニテストないしアンケートをするが、それだけを待っている形式的出席の学生も少ないのかもしれない。大規模講義の私語は実際にはどのくらいか。早稲田からのある学生はアンケートに書いている。去年、筆者が早稲田で教えた学生なので、「去年と比べて先生のノリが悪い。この学生たちの態度には驚きました。講義を聴かないのなら出席しなければいいのに」と。実際、初回と2回目くらいまでは、後ろのほうではかなりうるさかった。毎回厳しく注意して、授業の後半に入ってきた学生は入室を拒否した。私語を注意されたら試験の得点から1点マイナスというルールを作

った。(もっとも初めて来る学生には通用しないので、TAの出番は多かった。)

私語は減った。今では、「全カリなのに静かで、講義に集中できる」というアンケート結果も複数ある。アンケートによれば、他大学の学生は、全カリの講義がうるさいと感じる傾向が強い。単位相互交換をしていて、立教の評判が悪くなるのは避けたいと思い、「静かな講義」をモットーにTAと2人でがんばっている。携帯電話でメールをする学生から、携帯を取りあげるTAの仕事は誰にもできることではない。

(3) 反省点と改善案

私語の多さ、他大学の学生たちから驚かれるほど態度の悪さ、講義中の出入りが必ずあることなどは、今年、履修者数が700～900名ほどの大規模講義になったことと関連があると思う。従来、150名規模で講義していたときはほとんど私語を注意した覚えがない。全カリから履修者数400名以上の講義をなくすべきであろう。立教生の評判が他大学との単位互換により低下することは、全カリにとってだけでなく立教にとって大きなマイナスだからである。

なお、注意した学生が講義の後待っていて「逆ギレ」されたこともある。これは要注意。

他大学、他学部の講義では、遅刻、私語、メールはないのか、他大学の講

義を取った学生から個人的には話を聞いたことがあるが、全カリで学生からアンケートをとってみてもよいのではないだろうか。

また、FDを各学部でさかんにすべきであろう。結局それが全カリの講義の充実につながる。FDが無理なら、学生に大規模講義だけでも学期末にアンケートを実施するという方法もある。筆者の経験によれば、「この講義は分かりやすかったと思いますか。5段階の中から1つ選んで下さい」などの細かい項目はかえって煩わしいので、「この講義についての感想や希望があれば書いて下さい」というものを受講生に渡すだけでよい。教師が、思ってもみない攻撃と激励にさらされるのもまた一興であろう。

Ⅲ まとめ

服部(司会) 皆さんそれぞれに授業の工夫をしておられたり、あるいは不満をお持ちだということがよくわかりました。

印象に残ったのは、西原先生と柴崎先生が、全カリの科目を教えていて、自分の講義が問われる、あるいは専門科目への役割があると言われた点です。これは、教師自身の側の話として重要なことであると思います。

星野先生がおっしゃっていた、学生的前提がばらばらだという問題は、かなり重要な問題で、全カリを始める際、

あるいは一般教育をやめて全カリに入っていく際にいろいろな議論があったなかで、少し欠けていた部分であったと思います。こうした点をどうするか。それは音楽学に限らないだろうと思います。そういう意味では、それぞれ個々の科目を提供するわれわれの側が主体的に判断して、それぞれの科目の位置づけを見直さなければいけないと思いました。

半期コマで期待に応えられないという問題は、各科目が背負っている問題で、あらゆる科目が、半期コマになったら中途半端でいいということではないと思います。半期コマというのは、多くの先生自身がそれで教育を受けたことがないわけですね。半期である科目が終わってしまうということに慣れていない、どうするのかという問題があらうと思います。

橋本先生が指摘していた、全員に発言を義務づけるという問題は、最後の鈴木先生のゼミでもうまくいったということですが、半期コマだったために書くことについてはうまくできなかったというお話でした。確かに十数回の授業で添削を繰り返したとしても、人数が20人前後だとしても、大変なことだと思います。

多くの先生が言っておられたことに、大人数の問題があります。橋本先生も来年から大人数教室になるわけですが、この問題はどういうことになるのか。

柴崎先生が、学生の興味が高い宇宙

の授業は、理系の学生に極めて有益であるとおっしゃいました。つまりは、理学部の専門教育では、全体像を提示できない。哲学的なことは提示できないが、全カリのなかではできる。これは全カリ総合科目の存在意義の一つだと思います。

堀先生からのかなり具体的な提案は、それぞれに重要だと思います。つまりは、われわれの側が主体的に授業を提供しているのかどうなのかという問題、それから、学部との有機的連携はどうなっているのかという問題。学部との関係でいうと、責任コマを消化するとか、人数を出すだけというような関係、どちらかという提供義務の部分だけに陥っている部分があると思います。

そして、全カリをつくりあげるなかで、夜遅くまであれだけ会議をして、ものすごいエネルギーを費やしたにもかかわらず、今でもそのエネルギーはすごいわけですが、その投入しているエネルギーと学生の意欲の差というのは、学部の授業にもあるでしょうけれども、全カリの場合には特別な形で出てくるようなところがあります。さらには、全カリの運営組織が教授会をもう一つやるような形で組織されている問題もあります。これもまた考えなければいけません。だからといって、教員のエネルギーをどうにかしろというのではないのですが、つまりは、主体的に何を提供するのかとわれわれが問われたのだと思います。

また、長島先生のおっしゃった、わかりやすい授業、興味を持てる授業ということ。情報科学では、学生が150名という形でコンピュータを使っている授業をされて、その評価について、ノートがとりにくいということがあったわけです。今後、高校などでパワーポイントを使った授業なども当たり前のように経験した学生が増えてくると、大学教育も黒板も使わずしゃべっているだけというような旧来の形では、なかなか学生は満足しないだろうなと思いました。

沼澤先生から紹介があった、体育実技に対する学生のアンケートでは、楽しいが半分、必要だというのが半分、一方で講義は要らないというのも同じような数がいたという部分ですね。つまり、体育実技の問題も、きちんとしたかたちの議論をして、科目展開ということが大学全体でなされたのだろうか。全カリの導入のときにいろいろな議論があったところですが、学生に迎合するという意味ではなくて、学生の希望をどう取り入れていくのか、という問題です。

それから、すごく重要であると思ったのは、体育専門の先生が、たとえば所属学部のコミュニティ福祉で障害者スポーツ論のような授業を展開しようとしたら、全カリの担当義務コマ数とどう兼ね合いがとれるかということになった。学部と全カリとのかわりというかたちではあるのですが、言語の先生とか体育の先生が、専門教育にどのようにかわつ

ていったらよいかという一つの流れを今後どうしていくのか。これは全学的な課題だろうと思いますが、そうした課題が提起されました。

また、多く出されたのが、授業の人数の問題。これは早急に解決しなければいけないことではないかと思えます。他大学、早稲田や慶応では抽選が当たり前ようになっていて、それに慣れ親しんだ学生たちは、教室があふれかえると、先生、すぐ抽選のくじを作ってくださいなどという形になるのですが、立教ではそれでいいのかという問題があります。そうしたことをどうするのか。そして、全カリをどう位置づけるのかという宿題をもらったと思えます。

長い時間にわたって、実のある紹介、そして議論をありがとうございました。